

魅力ある環境づくりと保育者の役割
ー幼児教育の独自性から科目「保育内容ー環境」を考えるー

藤澤典子¹ 佐々木利子²

Creation of the Attractive Environment and the Role of Childcare Workers
Consider the subject “Nursing Contents- Environment” from the characteristics of
early childhood education

Noriko Fujisawa, Toshiko Sasaki

要約

幼児教育では、子どもが周囲の環境との関わりを深め、発達に必要な体験が得られるような魅力ある環境を構成していくことが求められる。そのために果たす保育者の役割は大きい。本稿では、子どもも若い保育者も直接的・具体的経験が不足している現代、改めて環境構成の意味や方法について、幼児教育の独自性の視点から考察した。その際、科目「保育内容ー環境」の授業で用いることができるような事例を取り上げた。

キーワード：環境による教育 生み出し型のカリキュラム 創造的な保育者の存在

(Abstract)

In early childhood education, it is required to create an attractive environment where children can deepen their relationship with the surrounding environment and gain the experience which is necessary for the development. Childcare workers take an important role for this creation. Today, not only children but also the young childcare workers are lacking the direct and concrete experience. In this article, I considered the significance and the way of the environment creation from the perspective of characteristics of early childhood education. In this process, I picked up some cases which are related to the subject “Nursing contents- Environment.”

Keywords : educating children through their environment, generative form of curriculum, creative teachers

受理年月日：2017年11月30日 ¹⁾高松市立塩江小学校長 ²⁾高松短期大学保育学科講師

1 幼児教育の基本

平成30年4月1日から新しい幼稚園教育要領に基づいて幼児教育が展開される。今回の改訂では、幼稚園・保育所・認定こども園に共通する幼児教育のあり方や、乳児からの発達と学びの連続性、小学校教育との接続のあり方などが明示された。これまでの教育・保育が大きく変わるものではないが、幼保一体化施設の増加、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の実現に向けて、改めて幼児教育の基本を押さえておきたい。

幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う極めて重要なものである。その教育を支えるために必要なものは、親子の絆の形成に始まる家族という親しい人間関係の場としての家庭であり、同年代の幼児と一緒に過ごす集団生活の場としての幼稚園等の組織や施設である。幼児教育に携わる保育者（幼稚園教諭・保育士・保育教諭）は、幼児期の発達の特性を踏まえ、幼児の主体的な活動が確保されるような環境を計画的に構成しなければならない。また、幼児一人ひとりの行動の理解と予想に基づき、環境を再構成する力量も必要である。

2 幼児教育の独自性

幼児教育に携わるにあたって、小学校以降の教育との違いを理解し、幼児教育の独自性を生かした指導を行うことが大切であると考えます。小学校勤務経験が長い筆者は、8年間幼稚園で過ごした経験から幼稚園教育の独自性を次のように捉えた。

2.1 「生み出し型のカリキュラム」

幼稚園教育要領のねらいに示されている心情、意欲、態度は、教師が時間割のように計画した活動を行わせて育つものではない。幼児が自ら周囲の世界に働きかけて様々な活動を生み出し、それが幼児の必要感や興味などによって連続性を保ちながら展開されることを通して育てられていくものである。つまり、教師主導ではなく、幼児一人ひとりが教師の援助の下で主体性を発揮しながら活動を展開していくのである。つまり年間固定されたカリキュラムをこなすという教育ではなく、自由で柔軟性に富んだ生み出し型のカリキュラムを創造していくのである。

2.2 「環境による教育」

ものや人などの様々な環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味や関心をもって環境に働きかけ、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育である。

幼児教育のあり方が実に多様なのは、この独自性に因るものと考えます。幼稚園教育要領等の改訂のねらいに沿うよう、保育園、認定こども園においても、この良き独自性を生かした保育の展開がなされることを期待する。

3 幼児が主体的に関わる教育環境を創るために（幼稚園の生活の特色から）

筆者の幼稚園教諭時代を振り返りながら、幼児が豊かな生活を築いていくための環境構成や指導のあり方について考察する。(以下の事例の名前(太字)は、すべて仮名である)

3.1 ゆとりある時間の中での指導

3.1.1 1日を通しての指導

いわゆる時間割というものがなく、指導案の最小の単位は日案である。それは、子どもが自分の必要感に応じて生活しているところへ教育をもっていくという“生活の教育化”という考えに基づいている。これにより、子どもたちは時間割に追われず、ゆったりとした時の流れの中で暮らすことができる。保育者は指導にあたり、子どもたちが遊具や砂場で遊んだり、先生のお話を聞いたり、昼食を食べたり、トイレに行くことなど、どれも同じように重要性をもった意味深い活動として捉えている。

このような活動は、時間の流れの中で展開され、年長児クラスともなれば「もうそろそろ片付けの時間かな」とか「まだ〇〇だから〇〇することができる」といった時間の流れの区切りが可能となる。また、すべての活動に始めと終わりがあるのではなく、活動が時間の中では重なり合っているように見える「ながらとしての活動」、主要な活動の合間合間になされる「隙間としての活動」、あちこちぶらぶらと動き回る「回廊としての活動」など、子どもたちの1日はうねりをもって進んで行く。

どのような1日(生活の流れ)にしていくかは、天候・保育時間・子どもたちの遊びの様子や欲求の傾向・子どもの姿を受け止めての保育者の願いなど様々な要因を考慮にいれながら考える。予定通りの1日を送ることもあれば、活動内容や時間を軌道修正しながら進む日も多い。

事例 子どもたちとつくり出していく時間	5歳児 7月
---------------------	--------

月に1回、「ぴかぴかデー」として、子どもたちと一緒に園内のあちらこちらを掃除している。最初は雑巾の絞り方や箒の掃き方など、掃除道具の使い方を正しく知ることから始め、慣れてくると保育室、廊下等を掃除していくようにした。

7月の掃除は遊戯室。ぞうきんを絞ることも上手になり、広い床を拭いては雑巾をゆすぐことをテンポよく繰り返していくうちに、予定していた時間よりもずいぶん早く遊戯室の床をきれいに拭き上げることができた。掃除が終われば昼食準備をすることを、朝の集まりの時に周知していたが、準備開始までにまだ30分近くある。そこで、片付けも終えた子どもたちとこの時間をどうするか話し合ってみた。

「外に出て遊びたい」という声も多かったが、いろいろな意見が出る中で、最近読み進めていた物語絵本を楽しみにしていたひろきが「30分もあったら、本を最後まで読んでしまえるんとかうがかな」と言ったことに多くの子どもたちが賛同し、話し合った結果、昼食後に戸外で遊ぶこととし、この時間は物語絵本をみんなで聞くことになった。

結局、最後まで読み終えることはできなかったが、物語の終盤にまで進んだことで、子どもたちは「もうちょっとで終わるね」「明日が最後になりそう」と、満足そうであった。「み

んなで掃除を頑張ったから、早く終わって本も読めたね」と担任が言うと、「今度も頑張るからね」と、張り切った返事が返ってきた。

3.1.2 じっくりと取り組める時間の確保

子どもたちが十分に遊び込むことができるだけの時間やその遊びを見つけ出すまでの時間をたっぷりととることができる。また、今日できなかった活動を翌日に延ばしたり、またの機会の到来に期待したり、逆に今日の続きを明日、あさってと繰り返し続けて楽しむことができるようなゆとりもある。一人一人が興味を持ったことに、自分のペースで納得がいくまで取り組む姿をまずは大切にする。

時には、今活動していることを中断して片付けに向かわなければならないこともあるが、そのような時には、全員が集まってくるまでの時間を待ち、子どもたちを急かさないようにする。なぜなら、中断するということは自分の心との葛藤をするわけであり、自分の気持ちを片付けに向かわせるための自分づくりの時間が必要だからである。このような経験を何度もするうちに、次第に次の予定や活動に向かって行動を早めることができるようになると考えられる。手際よく片付けができるようになるための手順や工夫は、配慮事項の一つである。

事例 お店ごっこのひろがり

5歳児 6月初旬

地域のお祭りがあった翌日、子どもたちと出店の話をしている中で、「たこ焼き屋さんがしたい」という声が上がった。必要な材料を考え、子どもたちは廃材コーナーへ、保育者は教材庫へと出向いて材料を探し、たこ焼きやお皿にするものなどをそろえた。保育者もアドバイスしながら、出来るだけ昨日経験したお祭りの様子を思い出して作ったたこ焼きを並べ、食べる場所も作ってお店屋さんを開店。クラスの子どもたちや異年齢児がお客となり、にぎやかな売り買いに、お店屋さんとなった子どもたちも満足そうだった。

その様子を見ていたあいたちが、「私たちもお店屋さんがしたい」と保育者に伝えに来たので、「したいお店が決まったら教えてね」と声をかける。しばらくして、「かき氷屋さんがしたい」と決めてきたので、一緒に材料を考えながらそろえていった。しかし、たこ焼き屋の始まりからするとかなりの時間が経過しており、片付けの時間となってしまった。「もう片付けだね。お店屋さんどうする？」と尋ねると、「明日でもいいから続きがしたい」と気持ちを引きずっている様子が見られたので、保育室の片隅に、翌朝すぐに取り掛かれるように材料をまとめておくことにした。

翌朝、あいのグループの子どもたちは、登園してきた子どもからお店の準備を始め、この日は、たこ焼き屋とかき氷屋が並んで売り買いを楽しむ様子が見られた。この後、この様子に触発されたクラスの子どもたちは、金魚すくい、くじ引き、アクセサリーやさんなど、一日の遊びの様々な時間を使って、グループ、または個人で様々なお店屋さんになることが続いた。

3.2 生活の主体は子どもたち

3.2.1 自由感を持って遊びを展開する

自由な時間に何をして遊ぶかは、基本的には子どもたちに任されている。子どもは、したいことや仲間を探し、自分たちの遊びを展開していく。どのような活動をするのか自分で判断し決めることにより、自己目的感が持てる。どの場所で何を使ってどのような活動をするか、自由に選択したり、決めたりできるような探索可能な空間と様々な物や状況を教師は用意しておく必要がある。

幼稚園での遊びは、子どもが、その過程や結果を大人に決められたり評価されたりすることなく、虚構的な世界と現実世界とを自由に行き来して楽しみ、そうすることにより精神的、身体的に自己を開放して安定した状態になることだと捉える。

小学校での生活科と比べると、具体的な活動や体験を重視する点では似ているが、生活科は一定の目標と内容を持った教科であり、学習するために必要な活動が教師により設定され、方向性をもった具体的な指導がなされるという点では異なる。

幼児期の子どもは、遊びの世界で、一見無駄に見えるような過程を踏みながら様々な機能を使っているうちに、自ら未分化なものが分化し、混沌が整理され、ルールが見えてくるのである。自分から様々な経験を整理し、原理やルールを発見する力を獲得していくことは、生涯にわたって学び続けることのできる人に繋がっていく。

事例 園庭の整備の手伝い

4歳児 6月初旬

梅雨になる直前のこと、砂場から流れ出た砂が園庭全体に広がって土と混ざり合い、雨が降るとぬかるみ状態になるため、園庭でも特に状態のよくない場所の表面の土を取り除く作業を、筆者がしていた。

子どもたちも戸外遊びをしている時だったので、筆者がシャベルで土をすくっては手押し車に入れ、園庭の隅にある直径1メートルほどの大型タイヤまで運んでいる様子を見つけたしゅん達3人の男児がそばに寄ってきた。「園長先生、何してるん？」と問われたので「ここ、雨が降ると土がドロドロになるでしょう？サッカーや自転車で遊びやすいよう、ドロドロになる土を除けているの」と説明すると、さらに「それ大変？」と尋ねてきた。タオルを首に巻いて、汗を拭きながらしている様子を見てのことと思われたが、「うん、力があるからね」と返すと、「俺たちが手伝おうか？」と嬉しい申し出があった。

そこで、砂場の手押し車とシャベルを持ってきて、かき集めている土を運ぶよう頼むと、「わかった！」と砂場まで3人で走っていき、それぞれに道具を持ってくと手押し車一杯に土を入れ、運びだした。大型タイヤの中に土を移すと走って戻ってきて、また土を入れて運ぶ。ところが2回目に運んで行った後、3人とも戻ってこなくなった。

筆者も土を運んで大型タイヤのところに行くと、タイヤの中に入れた土を3人で平らにならしながら、タイヤの中にある虫を捕まえようとしていた。「どうしたの？」と声をかけると、「土の中に埋もれるから、捕まえて(外に)逃がしてあげる」と返事があった。そこで、「逃がしてあげたら、またお手伝い頼めるかな？」と尋ねると、虫を捕まえることに集中し

ながらも「いいよ」と答えた。その後、しばらくして「やっと逃がしてやった」と、嬉しそうに言いながら、3人が戻ってきた。もう一度土を入れて運んだところで片付けの時間となり、「園長先生、俺たちもう帰るね」と声をかけて部屋に戻っていった。

「今はこれをする時間だから、最後までやり遂げよう」といった、責任感をもって行う活動もあるが、今回はあくまで遊びの一環のような形で、手伝いを楽しむものと位置付けていた。虫探しも、子どもたちにとっては自然な意識の流れだったと思われる。

担任からは、「部屋に戻ってきた時、『園長先生の手伝いしてきた』と、胸を張って言っていました」と報告があった。

3.2.2 遊びの中で育つ子ども

幼稚園という集団生活の中で遊びを展開していくことは、楽しいことばかりではない。例えば、自分が気に入り、欲しい遊具に先着者がいる時、何らかの意思表示をして行動をとらなければいけない。「貸して」と交渉するか、空くのを待つか、諦めるか、無理矢理取り上げて反撃や拒否を受ける覚悟をしなければならない。困った状況の時、どう立ち向かうか、今持ち合わせている自分の精一杯の知情意と行動力を働かせなければならない。しかし、このような状況に出合うことは、健全な発達には欠かせないことである。いざこざや葛藤を経験することは、他者のおかれている状況や気持ちを考える機会となるし、そのいざこざの解消に向けて自己を主張するだけでなく、互いの考えを伝え合い、互いの権利や公平性、さらにルールなどを考えることができるようになる。また、結果によっては、良心の痛みを感じる機会ともなる。まさに「生きる力」の基礎を遊びの中で培っているのである。

教師や周囲の大人達には、道徳的判断や社会的規範を教えるという重要な役目があるが、子どもにとって一方的に教えられたり、それに従う経験をしたりするだけでは、道徳性は育たない。教師は、いざこざの場面で子どもたちがどのようなやりとりを展開し、何を経験しているのかを見極め、適切に介入していくことが肝要である。

事例 「替わって」「いいよ」のやりとり	3歳児 10月
---------------------	---------

3歳児も10月頃になると、集団生活のルールが理解できるようになり、遊具の貸し借り時に「貸して」「いいよ」と言うやり取りが聞かれるようになる。しかし、いつも「いいよ」と言ってもらえるわけではなく、時には「だめ」と言われ喧嘩になったり、「貸してくれない」と保育者に言ってきたりもする。

気持ちのいい秋晴れの下、園庭に白線で線路をこしらえ、2人乗りの三輪車を電車に見立てて遊んでいた時のことである。他の遊びをしていたゆかが、三輪車を走らせているよしきのところに近づいてきて、「替わって」と言ったが、よしきは何も言わずにそのまま走りすぎた。ゆかはちょっと怒った表情になり「替わってよ！」と声を荒げながら後をついていくが、よしきは「だめ」と言いつつ走り続ける。追いかけるのをやめたゆかは、近くにいた保育者のところに来て「よしきくん替わってくれん。何回も替わってって言ったのに」と訴えた。保育者が「ゆかちゃん、三輪車に乗ってたかったんだね。替わってもらえなくて、嫌だったんだね」と話しかけると強くうなずき、保育者に交替を促してほしい様子がうかがえた。

一方よしきは、後ろの座席に友達を乗せて、線路に沿って走っている。

そこで、ゆかと手をつないで線路の何か所にベンチを置いて作った駅に行き、そこに座った。「ゆかちゃん見て。よしきくん、線路のところ走っているでしょ。このベンチは駅だから、ここで待っていたら替わってくれるかもしれないよ。先生と一緒に待ってようか」と話しかけると、今度は少し考えて、ゆっくりとうなずいた。ちょうど駅に近づいたよしきに「ゆかちゃんと駅で待っているからね」と声をかけると、ちらっと見て行き過ぎる。ゆかとさっきまでしていた遊びのことや園庭の草花のこと等話しているうちに、よしきが一周して近づいてきた。そして、駅のところで止まると「交替！」と言って、三輪車から降りた。

ゆかは嬉しそうな表情になり、三輪車に乗るとペダルを力強く漕ぎ出した。よしきには「交替できたね。ゆかちゃん嬉しそうだね」と話しかけると、にこっとして「うん。駅で待ってたから」と答えた。

3.2.3 生活を進める

幼児自らが生活の作り手、担い手となって生活を進めていく。特に、年長組になると、当番の仕事や行事など園全体の動きに関わることにより自分たちの生活は自分たちの双肩にかかっているという気持ちが強くなる。しかし、ただ活躍の場を与えれば幼児の主体性が育つというものではない。例えば、当番活動をするにも、役に立つ自分を感じさせることが大切である。仕事の分担や順番を最初から決めるのではなく、教師の「仕事を手伝ってもらって助かった」という気持ちの伝授から始めたい。どの仕事にも一緒に働きながらやり方を教え、やりたい人を募り、働くことの心地よさをクラス全体に広げていきたい。

事例 金曜日の当番	5歳児 10月初旬
-----------	-----------

年長児は、園内の最年長者として様々な役割を担っている。年度当初は、入園間もない3歳児の片付けや着替えの補助をしたり、4歳児と一緒に散歩に行くときのリードをしたりした。6月のプール開き前には、毎年年長児がプール掃除の仕上げ(保育者がある程度掃除している)をしている。また、毎週末には園内の様々な場所を整理したり清掃する役割を担当し、グループごとに、担当となった場所で絵本をきれいに並べたり、靴箱を掃いたりしてきた。

10月になると、これまでと当番活動への取り組み方が、少し違ってくる。その要因として、運動会の取り組みが考えられる。運動会では、最年長者として演技や競技も昨年度よりステップアップした内容となるが、保育者のアドバイスや支援により、やりこなせたという喜びが自信となっていることが感じられる。また、各競技の準備や片付けをはじめ、様々な役割を担うことも多く、その責任を果たせたという思いも、表情や動きから感じられる。

このような経験から、当番をする時に「自分たちに任された役割」という意識が強くなり、本を並べたり靴箱を履く時にも、きれいになっているか確認したり、「こうしたほうがいい」と友達と話し合う姿が見られたりする。それに対し保育者は「こんなふうに考えたんだね」「みんなで相談したんだね」等、子どもたちなりに考えたり工夫したと思われるところを、良さとして言葉で伝え返しているが、その時の子どもたちの表情は、誇らしそうな、嬉しそ

うなものであり、とても印象的である。

3.3 多様な活動の形態

3.3.1 個人あるいは小集団での活動

子どもは、用意された物的・人的環境の中から、1人、あるいは2人以上で好きな遊びを見つけ、自分の思いに沿って遊ぶ。それは、今までに習得した知識や技能を試したり、自分から課題を見つけて挑戦したりする園の生活の中心的な活動である。その日、その時に子どもがどんな遊びをするかはある程度予想することができるが、思いがけない遊びが出てくることがある。多様な遊びにも対応できるような計画性と流動性のある環境を整えておく必要がある。子どもだけでは気付かない遊びや、季節や伝統的な遊びを取り入れるよう意図的に働きかけることもある。

この自由な遊びの始まりのきっかけを整理すると、

- ・自分で見つける
- ・友達や先生がしていることを見て始める
- ・友達や先生に誘われて始める
- ・あらかじめ用意されていた物に誘われて始める

など様々であり、遊びの展開や終焉の仕方も多様である。

事例 キバナコスモスの種取り	3歳児 10月初旬
----------------	-----------

ゆうじは、3歳児学級の中でも草花への関心が強い。これまでも、花の植え替えや水やりをしているとやって来て「何してるん？」と尋ね、作業をじっと見るのがよくあった。「お母さんもお花好き」と言っていることから、家庭でも草花に触れたり、話題にしたりすることが多いのではないかと思われた。

10月に入り、キバナコスモスの花が枯れ始め、種ができた。3歳児が戸外遊びをしている時に種取りをしているとゆうじがやってきて「園長先生、何してるん？」と尋ねるので、「キバナコスモスの種ができたから集めているの。これをチューリップの花が咲くころにまた蒔くんだよ。そうしたら、また秋にお花がいっぱい咲くから」と伝えた。しばらく筆者が種を取る様子を見ていたゆうじだが、「これお家もって帰ってもいい？お家にもお花咲かせたい」と言ってきたので、「どうぞ」と、種入れ用に小さなカップを渡した。

それから、カップがいっぱいになるまで、種を探しては取ってカップに入れながら、種の形や大きさなど、ゆうじなりに気づいたことをいろいろと話してくれた。種はこぼれないように袋に入れ、すごく大事そうにかばんにしまった。降園時、母親にも伝えると「春になったら一緒に種を播いてみますね」と笑顔で答えてくれた。

事例 園生活の始まりの時期の遊び	3歳児 4月当初
------------------	----------

幼稚園に入園したばかりの3歳児は、園生活に期待を示す子どももいるが、母親から離れ一人で過ごすことへの不安を強く表す子どもの方が多く見られる。そこで、入園当初は子どもたちが興味をもち安心して遊べるようにと考えながら、保育室内にいくつかのコーナー

を設け、少人数でゆったりと遊べるように環境を整える。

ままごとは、入園前にも多くの子どもたちが経験していることから、食べ物、皿やコップ等の食器を多く準備し、個々にごちそうを盛りつけたり食べたりできるようにする。積木や自動車セット（線路を組み立て小さな車を走らせるもの）も、家庭での遊びに近いものとしてコーナーを設ける。特に自動車セットは視覚的にもわかりやすく、組み立て方でいろいろなコースができ毎日変化していくことで人気がある。このため、保育室中央に広めのコーナーを設け、線路や自動車も多めに用意して朝の受け入れをするようにした。登園後、持ち物の片づけが終わると、男児の多くは自動車コーナーに集まり、保育者と一緒に線路を組み立てたり、自動車を走らせることを楽しんだりした。

遊びを楽しむことで園生活にも安心を感じるのか、朝、母親と離れるのがスムーズになる子どもが少しずつ増えていった。

3.3.2 クラス全体で行う活動

子どもは、好きな遊びをしながら、心を総動員して活動に取り組むことができるようになる。同時に、先生や多くの友達と遊ぶ楽しさや力を合わせて遊びを進めることの喜びを感じ取ることができるようになる。

クラス全体で行う活動は、みんなで気持ちを共有したり、子どもの興味の開発や遊びの選択の幅を広げたり、経験を深めたりする活動である。主な内容は次のようなものである。

- ・初めて使う遊具や用具について、安全な使い方や活用の仕方の基本、遊びの範囲など園でのきまりを伝える
- ・子どもが見つけた遊びやお勧めの遊びをクラス全体に広げる
- ・歌やダンス、ゲームなどをみんなと一緒に活動することによって、より楽しさを感じさせたり、集団への所属の喜びを感じ取らせたりする
- ・同じ題材で絵を描いたり、運動遊びやリズム遊びをしたりする。みんなで活動するうちに興味や関心が増したり、今まで不得手と思っていたことにも挑戦意欲が高まったりする。多様な文化に触れる機会にもする
- ・話題提供による話し合いや絵本の読み聞かせをする。自分と違った考えを持つ人の存在に気付いたり、話を聴く楽しさを味わったりするようになる

事例 降園時のおしらせ

5歳児 12月初旬

降園前にクラスで集まったときには、一緒に歌を歌ったり絵本を読んだり、保育者や子どもたちからクラスの子どもたちに様々な話をしたりしている。この少し前の時期に、グループ活動に小さなホワイトボードを使い、自分たちのメモやお知らせに使った経験から、クラス共有のお知らせボードを設置し、「降園時にみんなに話したいことがある人は、そこに名前を書いておく」ようにしてみた。1日を通して、みんなに伝えたいと思うことがあった時にボードに名前を記入し、降園時の集まりで、保育者が「〇〇さんどうぞ」と呼びかけると、自分からのお知らせを伝えていく。

内容は、「今日縄跳びが20回跳べました。見てください」「ドッジボールしたけど、人が

少なかったので、明日は誰か来てください」「今、こんなものをつくっています。カップが足りないので、お家にあったら持ってきてください」など、様々なものがあるが、自分が伝えたいと思ったことを伝えられたという嬉しさはどの子どもも感じているようで、話し終えると大きく息をつきながらも笑顔になっている。

時には、話したことに対して質問したり、「こうしたらいいと思う」といった議論の場になったりすることもあり、ボードに書かれる名前は次第に増えていった。それでも、保育者は人数とそれぞれの話したいことをあらかじめ確認しておくことで、話し合いのための時間を予測でき、同じような内容をまとめたり、話すことが苦手な子どもには時間を確保したりと、みんなが満足できるような場の構成がしやすくなった。

事例 広告誌の棒を使った船づくり

4歳児 7月初旬

広告紙は、手軽な教材として様々な遊びに活用されている。3歳児の後半には、保育者が広告紙を細い棒状に丸めたものに飾りをつけ、ステッキにしたごっこ遊びや剣に見立ててのヒーローごっこが、グループの遊びとして行われていた。

4歳になった当初、製作コーナーに広告紙とそれを棒状にしたものを置き、細かな作業を得意とするさきに「棒づくり、やってみる？さきちゃんならすぐ出来るようになると思うよ」と声をかけてみた。「うん、やってみる」というさきに棒状にするための巻き方を教え、何度も繰り返してみるのに付き合っていると、それを見た女兒が数人やって来て、「私たちも作りたい」と言うので、それぞれに作り方を教えていった。

最初は緩めで太く巻いていたが、何日かすると細く固く巻けるようになり、「先生のと、一緒ぐらいになった！」と嬉しそうに見せに来た。「本当だ、すごいね」と言うと「うん！」と張り切ってさらに作る。それを使って遊ぶことよりも巻くこと自体を楽しんでおり、出来上がったものを他の子どもたちにも分けながらも、棒が少しずつ増えていった。

指先を使う経験として、他の子どもたちにも棒作りをさせたいと思ったのと、たくさん作れたら、その棒を使ってクラス全体で一つのを製作する機会にしたいと考え、クラスでの活動時に「この棒を使って、みんなで何か作れないかな？」と子どもたちに投げかけてみた。最初はイメージがわからなかったようだが、話していくうちに「お家が作れるかも」「乗り物にしたら？」と少しずつ意見が出てくるようになり、最終的には「船をつくる」ことになった。「みんなが乗れるくらいで、真ん中に帆があつて…」と、子どもたちがそれぞれに出した考えを担当がボードに設計図として描き、イメージをみんなで共有できるようにした。ここで、「先生、これだけの棒だと足りない気がする」と言う子どもがいて、まずはみんなで作棒を作り、その次に船を作りながら、足りなくなったらまた棒を作っていくことにした。

翌日、クラス活動としての棒作りでは、上手に作れるようになった女兒たちが指導役となり、うまく巻けない人の横で丁寧に巻き方を教えたり、出来るまで付き合う姿が見られた。

その翌日、いよいよ船作りを開始する。昨日みんなで作った棒を集めると、かなりの数になったことから「これなら出来るよね」「俺たちの船が作れるね」と、船作りを楽しみにする気持ちはとても高まっていた。グループごとに船のどのあたりを作るか相談し、分担して

製作に取り掛かる。棒を束ねたり組み合わせたりしては、それをテープで固定していくのだが、棒をもつ人とテープを巻く人等、協力し合う姿もあちらこちらで見られた。しかし、子どもたちが思ったよりも多くの棒が必要で、途中でみんなで棒作りをするグループ、あるだけの棒で何とかしようと話し合いながら工夫するグループ等、様々な姿が見られた。帆を担当したグループは、担任に手伝ってもらいながらもなかなか立てることができず、何度もやり直すうちに片付けの時間となった。

この日の遊びの振り返りとして「船を作ってどうだった？」と担任が尋ねると、全員が「楽しかった」と口々に答える。さらに「でも難しいところがあった」「棒が足りなくなっちゃいね」といった意見に対しどうするかを話し合い、翌日続きをすることとして、遊びの片づけを始めた。

3. 3. 3 異年齢での活動

普段の生活全てが異年齢の人と共にあり、異年齢の友達から得た遊びが広がったり、一緒に遊びの仲間になったり、年長者のすることを見習うといった姿はよく見られる。

また、このような自然な形での活動とは別に、入園式、遠足、運動会などを進める時などには、それぞれの意図に合うペアを組むようにしている。そうすることによって、年長者はその人なりのリーダーシップを発揮し、年少者は、頼れる相手ができることにより、過剰な負担を感じることなくその活動に楽しく参加することができるようになる。例えば、誕生会では共に創り上げていく楽しさを、修了式間近のお別れ会では、一年間を通して親しくなり憧れの存在である年長者にプレゼントするという喜びを味わう。

異年齢での活動は、体格や体力、それまでの経過や経験が違うので、保育者の関わり方がとても重要になってくるが、自分たちだけでは実現できないことができる満足感や、自分の新たな力を発見できる喜びなども味わえる。個々の成長にとって貴重な活動であり、何より年齢の違う他者を知るよい機会となる。誰と誰をペアにするか保育者間での話し合いが必要であることは言うまでもない。

事例 畑の水やり	4・5歳児 6月
----------	----------

地域の方の好意で、園から徒歩10分くらいのところに畑を借り、サツマイモを栽培することになった。しかし、園から少し距離があることから、つるさし(苗植え)と時々の水やりは4歳児も参加するが、主としての世話は5歳児がすることになった。そして、4・5歳児一緒に世話をする時には、5歳児が4歳児をリードしながら畑まで歩くこととした。

サツマイモのつるさしをする当日は、初めて畑に出かける日で、保護者の参加も多かったので4歳児の補助をお願いし、それぞれのクラスで歩いていくことにした。そして、その後の水やりは、5歳児が週に2回出かけていたが、この日は4歳児もサツマイモの成育を見るために一緒に行くことになった。

出発前、5歳児に「ばら組(4歳児)さんと手をつないで歩いていくけれど、どんなことに気を付けたらいい？」と尋ねると、「転ばないように引っ張ったりしない」「車が来る道は、ばら組さんを車の来ない方にしてあげる(車道側を自分たちが歩く)」等、自分たちが3・4歳

児の時に5歳児がしてくれたことを思い出しながら、注意する点が出てきた。さらに、「車の来ない道も横に小さい川(用水路)があったりするね」「じゃあそこも危なくない側にしてあげよう」と、道順を思い描きながら歩き方をみんなで確認した後、4歳児と手をつないで出発した。

園の門を出るとすぐ左側に水路があるので4歳児を右側へ、角を曲がると水路が右側になるので手を繋ぎ替えて4歳児を左側へ。車の通る道では右側通行のためまた右側へと、曲がり角に来る度に先頭の子どもから自分たちで手を繋ぎ替えていき、忘れていた友達にも「反対だよ」と声をかけていた。

水やりを済ませた畑の帰り道にも、また道の曲がり角が来るたびに4歳児を安全な方へと手を繋ぎ替えながら、園まで戻ってきた。「先生が何も言わなくても、自分たちでちゃんと出来ていたね」と伝えると、嬉しそうな笑顔になった。

3.3.4 日常生活的な活動

登降園、身支度、持ち物の始末、おやつや昼食、用便や手洗い、片付けや当番の仕事など日々繰り返される活動は、子どもたちが園でのやり方を知り、積み重ねていくことによって次第に自信をもって園生活を送ることができるようになる。他者に依存しないで自分のことができるようになることや、当番や片付けの仕事を通して、責任を持って最後までやり遂げたりみんなのために何かをしたりする喜びを味わうことは、自我の発達にとって重要なことである。

事例 降園の準備	3歳児 1月
----------	--------

初めて園生活を送る3歳児は、年齢による差も大きい、家庭での経験による差も非常に大きい。4月には、靴を履いたり、帽子をかぶりあごにゴムをかけたりすることもうまく出来ない子どもも見られている。

このため、年度当初は、「荷物を全部入れたカバンを補助してもらって背負うだけ」から、「出席ノートだけは自分でカバンに入れて背負う」「タオルをたたんで出席ノートと一緒にカバンに入れて背負う」と、少しずつステップアップしながら、自分でできることを増やしている。園服も、最初はすべて着せているが、「脱いだ時に袖をもとに戻す」「自分で着て袖を通す」「補助してもらいながらボタンをはめる」と段階を踏み、2学期末頃にはほとんどの人が自分で着られるようになる。

1月には「もうすぐお迎えの時間だから片付けようね」と担任が声をかけると、遊んでいたものを片付け、園服を着て、椅子を並べて座ることは、かなり短時間で出来るようになっていた。その後、ボードに「今日持って帰るもの」を絵表示し、ロッカーやコップ置き場等が混雑しないよう、グループごとの準備を指示すると、タオル、コップ、出席ノート…と、絵表示を確認しながら取ってきたものをカバンに入れ、また着席する。グループごとの時差も短時間になり、後のグループも先のグループの様子を見ながら待つことができるようになった。

全員が着席したところで、絵本を読んだり歌を歌ったりしながらクラス全員でのひと時

をゆったりと過ごせるようになったのも、これまでの積み重ねと信じられるものである。

3.3.5 行事的な活動

園には数多くの行事があるが、次のように整理している。

「節目としての行事」

自分自身の成長や発達の節目を感じ、自分の成長を喜び、新しいことに向けての挑戦意欲とがんばったという達成感を味わえるようにする。

「生活を豊かにする行事」

自然の美しさや不思議さ、大きさなどを感じたり、想像の世界を楽しんだりして、自分たちの生活を豊かなものにしていく。

「安全・健康にかかる行事」

きまりや安全な生活をする大切さを知り、自分の身体の健康や成長について関心を持つようにする

事例 焼き芋	3.4.5 歳児 10月下旬
--------	----------------

サツマイモを栽培し、秋に収穫後、蒸かしたり焼き芋にしたり、スイートポテト等のおやつにして、みんなで食することは、多くの園・所で毎年恒例の行事として行われているものである。筆者の勤務していた園では、毎年園庭で焼き芋にしてみんなで食している。

焼き芋の準備としては、まず焚火の材料集めから始める。10月中旬になると、ケヤキやサクラの葉が少しずつ落ち始めるので、戸外遊びの時にそれらを拾っては、段ボール箱に集めていく。加えて、近所の農家からいただいたもみ殻や、木工所からいただいた木くずを、前日には園庭に積み上げて焚火の用意をする。それだけで、もうわくわくした表情の子どもたちは、積み上げられた木くずやもみ殻の周りをぐるぐると回りながらのぞき込んだり、「明日が楽しみやなあ」と話したりして、なかなか保育室に戻ろうとしなかった。

焼き芋当日、前日に「明日は登園したらすぐに焼き芋の準備をするよ」と声をかけていたこともあり、多くの子どもがいつもより早く登園してくる。子どもたちの当園時間前から焚火には火をつけており、片付けの済んだ子どもたちは外に出てくると、火の燃え上がる様子を見たり、風向きによって煙が流れると「あ、こっちに来た」「煙たいね」と言いつつ離れたりと、わくわくする気持ちがその言動に見られた。焚火の周りに多くの子どもたちが集まる頃には全員がそろい、準備開始となった。

サツマイモの準備は、年齢ごとに作業内容を変えて行う。3歳児はタワシでサツマイモを洗い、きれいにする。そのサツマイモを4歳児が濡れた状態で新聞紙に包み、さらに5歳児がアルミホイルでしっかりと全体が包まれるように仕上げる。サツマイモの準備ができるまでに焚火は熾火となるようにし、その中に一人一個ずつ投げ入れた。サツマイモ全体が熾火で覆われるようにシャベルで被せ、その後は約1時間じっくりと焼き上げる。その間、戸外に出て遊ぶ時には、何度も火の番をする保育者に「もう焼けた？」と聞きに来て、「もうちょっと」と言われては遊びに戻ることを繰り返していた。

焼きあがったところで園庭にシートを広げ、青空の下、全員でいただく。焼きたてのイモ

はホカホカとして甘く、「おいしいね」という声があちらこちらで聞かれた。

昼食後には、お世話になっている地域の方へも「おすそ分け」をすることとし、子どもたちと一緒に届けに行った。「焚火で焼いたの？おいしそうだね。ありがとう」と言われ、園への帰り道はずっとスキップする姿が見られた。

3.4 創造的な保育者の存在

これまで述べてきた幼稚園での教育は、幼児が動くままに任せるといったものではなく生活の中に教育的価値を含ませ、そこへ幼児が主体的に関わっていくという、いわゆる“教えない教育”であるが故に保育者は創造的であらねばならない。小学校教科の指導書のようなマニュアルはない。子どもたちの傍らにいて、一瞬一瞬を温かく、そして本気で関わらなければならない。自分たちの保育空間の中でいかに工夫していくか、保育者の考え方や行動の仕方は、子どもの考え方や行動のモデルとなる。

以下は、「モデルとしてこうありたい保育者」の願いも含めて、保育者の役割について考えたものである。

3.4.1 状況を創る

その時期の子どもの姿を、自立に向けてより望ましい方向に変容させるために、ねらいを決めだし、物的・空間的・時間的環境を構成していく。よりの確なねらいを設定するポイントとして、次の3点を考える。

- ・その時期、子どもの中に一番育っている姿を存分に発揮させる
- ・その時期、子どもの姿の中に育つ兆しが見える側面を伸ばし、広げる
- ・その時期、子どもの姿の中に見られる問題点を解決していく

そして、その時期の具体的活動例を参照しながら、どのような遊具や用具、素材をどこに、どれくらいの量を、どのように、どれだけの期間出していくか、保育者はどのように関わっていくかを決めていく。「これで遊びなさい」ではなく、「やりたい」と思えるような状況を創っていくのである。

保育者には、幼児一人一人が主体的に取り組んでいるかどうかの見極めが必要になってくる。また、遊びの展開の仕方によっては、状況を変える柔軟さと多様な考え方を持ち合わせていなければならない。

事例 劇場ごっこがしたい	5歳児 4月
--------------	--------

年度当初、年長組になったという張り切った気持ちもあってか、「何かしたい」「やってみよう」という雰囲気が、多くの子どもたちから感じられていた。

そんな中、**るか**と**みき**が「劇場ごっこがしたい」と、担任に言ってきた。劇場ごっこがどんな遊びなのかよくわからず、内容について聞いてみると「劇場で映画がしたい」と言う。それをさらに細かく聞いていくと、紙芝居のように、絵を描いたものを見せながらお話をするのである。そこで、まずはお話を考えて絵を描くことになり、4つ切りサイズの画用紙を数枚渡した。

早速保育室の片隅のテーブルで、相談しながら描き出したものの、なんとなく落ち着いた様子が見られる。隣のままごとコーナーでのやりとりや、ブロックコーナーで作りながら話す声等、周りでしている遊びがにぎやかなのと、そばを通りかかる子どもたちに何度ものぞき見されるのが嫌そうだったので、保育室から離れた絵本コーナーで作成してみてもと提案する。「今なら誰も使っていないし、静かだと思うよ」「絵をどんなふうを描くか困った時は、すぐに絵本を見ることも出来るね」と言葉を添えると、「それ、いいね」と、すぐに絵本コーナーに場所を移し、続きを作成しだした。その後、時々様子を見に行くと、「ここまで出来たよ」と進行状況を説明しながらも集中して作り続け、その日のうちにほとんど仕上げることが出来た。

翌日には完成した絵を持ってきて、「みんなに見せたい」と言う。そこで、彼女たちの「劇場ごっこ」のイメージに近い場所として、遊戯室のステージを使ってすることを提案する。実際にステージに上がり、周りの状況も確認すると「ここでいいね」と納得したようで、すぐにお客さんと呼び集めようとした。しかし、昨日の製作の様子から、絵は出来ているものの絵に対するストーリーは漠然としているのではないかと思われたので、「一度先生に聞かせてくれる？」ともち掛けてみた。「いいよ」と言うものの、やはりストーリーがはっきりしないため、他の子どもたちが聞いてもわかりにくいと思われた。このことは、自分たちでも話しながら気づいたようで、ちょっと「どうしようかな」という雰囲気になった。また、紙を持ったりめくったりするのも二人では手が回りかねているところがあった。

これらのやり取りを遊戯室でしている時、入口あたりからりょうたがずっと見ていたので、「りょうたくんにも手伝ってもらったらどうかな？」と双方に働きかけてみたところ、「やってみる」とりょうたが加わり、るかたちも「ありがとう、じゃあここ手伝って」と3人で話し合って準備をしだした。ストーリーも担任を交えて何度か確認した後、クラスの子どもたちに「劇場で映画をしますので見に来てください」と案内する。10人程が集まったところで絵を見せながらストーリーを話し、最後に「これで終わります」と言った時には「すごいね」と友達から拍手をしてもらい、満足そうな表情だった。

そして、その次の日には映画を見たゆみとさきも「私たちも映画作りたい」と言ってくるなど、しばらく劇場ごっこが続いた。

3.4.2 遊びを流行らせる

幼児の遊び込む姿は、友達との関わりを通して充実、発展していき、そのような集団の中で個が生かされていく。一人ひとりの思いや活動を繋ぐような働き掛けや、大勢の友達と気持ち共有していく経験も必要である。そのために、保育者は、率先して遊びに加わったり、一堂に会したときに遊びやその遊びの楽しみ方を紹介したり、遊びのリード役になったりしながら意図する遊びを流行らせていく。

子どもたちがその遊びの中に「楽しさ」を見出せるかどうかは、保育者の手腕にかかっている。また、すぐに終わってしまうようなものは、その時期の子どもたちには必要ないものと考え、潔く引っ込めてしまうのも援助の1つである。しかし、ずっと後になってから流行

りだすこともあるので、子どもたちの取り組みの様子を長期的視点でみておきたい。

事例 コマ回し

5歳児 1月初旬

コマ回しは、文化の伝承や、手先を使い根気よく挑戦していく遊びの経験として、毎年取り組んでいる。具体的には、12月末に子どもたちに一人一つずつ投げコマを渡し、冬休み中には家庭で家族とともにやってみるように伝える。そして、冬休み明けから遊びの中でコマ回しの環境設定をしていく。

冬休み中に家庭で経験し、回せるようになった子どもたちは、友達と競い合いながら長く回そうとしたり、少し難しい回し方にも挑戦しようとしたりする。そこで、積木でコマ回しのステージをつくることを提案し、積木の面の広さや、高さ、斜面などで難易度を変えながら、挑戦してみるよう働きかけた。最初は平たく置いた面積の広いところで回せることで満足していたが、何回か挑戦するうちにかなり狭い積木の面や、穴のようになったところでも回せるようになり、それを友達に披露することで触発し合い、積木のステージも「もっと難しいのを作ろう」と言いながら作り変えては試すようになった。

一方、紐の巻き方もおぼつかない子どもも見られており、こちらには手を添えながら、紐を巻くことを繰り返してやってみよう根気良く付き合っていく。「さっきよりもきれいになったね」「固く巻けるようになってきたよ」など、少しずつの上達を認めながら、諦めずに続けられるよう支えていくことで、何日かすると回せる子どもも増えてくる。

何週間か続けて遊ぶことで、どの子どもレベルの差はあっても回せるようになり、自分なりの上達を嬉しく思う姿が見られた。

3.4.3 一人ひとりのよき理解者として

入園して間もない頃の子どもたちは、“先生だけ”が頼りであり、修了間近になると“先生がどこかでみてくれている”という安心感を持ってじっくりと遊ぶようになる。自分は先生に認められているという自己肯定感が、その子の自己性の発揮に繋がるのである。私たちは、子どもの生活する姿から、その子の今の意図や意欲、何ができて何ができないか、何を求めているのかなどを理解していかなければならない。しかし、いつも肯定的な働き掛けばかりできることはなく、場合によっては、その子があるがままに受け止めることができず、否定的な感情が働いてしまい関係を悪くしてしまうというようなこともある。よき理解者となるためには、保育者自身の自己性の在りようが問われ、また、その子どもの姿をどのように受け止めるかは、保育者が個々の育ちの道筋を如何に理解しているかにかかっている。

そこで、常に独りよがりな見方になっていないか心しておくことが大切である。「組織の中にいる全員で一人一人の幼児を育てている」といった意識を共有したい。

担任以外の者が、ある遊びを受け持ったり、遊びに入ってくる他のクラスの子どもを受け入れたり、行事の企画を輪番で担当したりして様々な幼児に関わることは、保育者の見方を話し合う機会を作ることになり、話し合いは幼児理解を深めていくことになる。何でも話し合うことのできる雰囲気と時間を作っていきたい。

また、幼児のよき理解者となるということは、その保護者ともいい関係を作ることでもあ

る。お互いの考えを伝え、聴くことが大切である。嬉しかったことや気にかかることを折に触れて話し、成長の瞬間を共に喜び合ったり、園と家庭とでどのような関わり方をしていけばいいのか知恵を出し合ったりする。

事例 誕生会の担当者として

11月

毎月実施している誕生会は、その月の誕生児を全園児で共に祝う場としている。年間を通して全教員が順番に企画を担当し、その時期の行事や季節の様子と重ねながら、誕生児が大きくなった喜びを発揮できる内容を考えている。11月は、園内でもきれいな落ち葉がたくさん見られることから、「落ち葉を使った衣装を子どもたちと作り、ファッションショーにしたい」と、企画担当から提案があった。

季節的にも内容的にも11月の誕生会にふさわしく、誕生児が活躍する場も確認した後、衣装製作やファッションショーでの担当者の関わりに生かせるよう、各担任から自分のクラスの誕生児の、製作への取り組み状況や技術力・表現力等について情報提供を行った。企画担当も、思いに沿った遊びの時間に誕生児たちと集まり衣装作りをしながら、その様子を各担任に報告していった。

誕生会当日、遊戯室中央にランウェイを設置し、自分が作った衣装を着て少し恥ずかしそうに歩く誕生児たち。自分が工夫したところや苦心したところも、それぞれに発表し、大きな拍手をもらった時には誇らしげな表情を見せていた。

その日の終礼時には、各担任から、自分の気づいた子どもの姿がそれぞれに伝えられ、成長を確認し合う場となった。

3.4.4 人生の先輩として

幼稚園は、将来子どもが会おうであろう生活世界を、ごっこ遊び・飼育栽培・造形活動・料理や食事の活動・話し合いやおしゃべりなどを縮小した形で提示していると考えられる。幼児は自分なりに園内の環境に関わることを通じて、生活世界への関わり方の基本的なあり方を学んでいるのである。そして、共に暮らす大人の関わり方がモデルとなる。

また、子ども同士の関わりを通して、将来仲間とどのように生き、適応し、新たな関係を作り出していくかも学んでいく。いざこざも、他者のおかれている状況や気持ちなどを考える機会と捉える。いざこざの解消に向けて、互いの権利や公平性、さらにはそれを保障するルールなどを考える必要性が出てくるからである。この過程で良心の痛みを感じることもある。しかし、保育者は、いざこざをやらせっ放しではいけない。必要に応じて介入し、双方の言い分を聞いたり、経験豊富な第三者としての見解を述べたり、時には折衷案を提示したりする。善悪の判断や社会的ルールを教えることもある。叱られるからしないではなく、自律的な道徳性の芽生えが育つことを願う。

4 保育の評価と省察

幼児期にふさわしい生活が展開されているかどうかは、子どもの姿でしか現れてこない。保育の評価は、テストとか表現物の出来映えなどではなく、実際の子どもの様子と保育者自

らの関わりのあり方を見直し、検討していくのである。保育者の感性と力量に委ねられているところが、幼児教育の難しさであり、外から見えにくいものと感じられる所以であろう。

「これでいいのだろうか」と自問自答する日々であるが、より良い方向へと環境を整えていくには、保育者自身に新しい気付きや幅広い視点が必要である。そのためには、日々、保育の省察を行っていく。事実を羅列するだけの記録ではなく、個々の「姿」として記録していくのである。

事例 「どうぞ、どうぞ」(自分の思い、他者の思いに気付く) 5歳児 6月初旬

この日は珍しく、もしかすると初めてのこともかもしれないが、年長組の女の子たちだけで、大型積み木を使っての家造りを楽しんでいた。これまでは、リズム室も大型積み木も男の子達が主導権を持って遊んでいることが多かった。リズム室の広い空間いっぱい、三角柱の積み木を屋根に見立てた素敵なお城風な家が出来上がろうとしていた。子どもたちは、お姫様というよりは、かいがいしく働く大工さんのようだった。しばらくして、数人の男の子達が入って来て、お城風の家気付いたようだが、余ったスペースと積み木で遊び出した。しかし、やはり積み木は足りなくなる。「ちょっとこれ貸して」と女の子たちと交渉し始めた。それは、屋根に見立てた三角柱だった。「絶対に嫌」と普段は物静かなみなこも譲るまいと頑張っている。「ひとつくらいいいやろ」「だめ」……。

しばらく押し問答が続いた後、ゆきが「どうぞ、どうぞ」と屋根の積み木を1個取って男の子たちに渡した。他の女の子たちは、不本意な様子ながらも、それ以上問答を続けることはなかった。

この日は教育実習中であり、多くの実習生がこの場面を観ていた。午後からの討議で、学生達は「ゆきのとった行動に感心した」「たくさんあるのだから1つくらい貸してあげてもいい」「相手のことを思いやった行動である」と感想を述べた。果たしてそうだろうか？

「よせて」「いいよ」「貸して」「どうぞ」、子どもたちの生活の中でよく耳にするやりとりの言葉である。入園したばかりの頃は、譲り合うとか待つということがなかなかできず、喧嘩とした毎日であったことを思うと、大勢の仲間との生活の中で学んできた言葉だろう。しかし、オウム返しに使ったらいいというものではない。この事例の場合、これまで味わったことのない積み木の家造りのおもしろさを、ゆきは感じていたのだろうか。「貸して」という男の子の言葉には応えたけれども、貸したくない女の子の気持ちを察していたであろうか。普段から相手の気持ちを考えようとする人柄の、ゆきならではの行動とは思いますが、その場しのぎの態度ではなかっただろうか。ゆきがこの積み木の家造りに参加していたのは、なかよしの友達がいたからと思われるが、もしゆきが、この遊びに没頭していたら、このような態度はとらなかつたかもしれない。

積み木の数は決まっているので、明日はどうするか。ゆきは、明日も家造りに参加するだろうか。もう少し子どもたちの遊びの展開を見守っていこう。

5 まとめと今後の課題

「幼児期にふさわしい生活」の充実に向けて、幼児教育の独自性という観点から考えてきたが、「遊びという非常に偶発的な出来事を教育化し、そのよさを生かしていく」ことを意図しながら実践を行うにあたって、教科書がないという難しさがある。特に、幼児の主体性と保育者の意図性をどのように組み合わせしていくか、保育者によって意識のずれが生じてくる。

保育者は、子どもの育ちの道筋を長期的視点で捉えた上で、今を充実させていく必要があり、その充実から次への芽生えが出てくる。その芽生えに気づき、さらに育っていくような環境を用意していきたい。

また、連携という言葉が重要視されているが、異校種、施設がそれぞれの独自性を生かしながら、役割を果たし、個々の子どもの育ちを繋いでいくような連携でありたい。

参考文献

- (1) 無藤隆編著 (2017) 『平成 29 年告示 幼稚園教育要領まるわかりガイド』 チャイルド社
- (2) 鯨岡峻・鯨岡和子著 (2001) 『保育を支える発達心理学』 ミネルヴァ書房
- (3) 永野重史著 (2001) 『発達とはなにか (シリーズ人間の発達 8)』 東京大学出版会
- (4) 幼稚園教育大全作成委員会編著 (2001) 『幼稚園教育大全 第 6 巻』 全国国公立幼稚園長会
- (5) 全国国公立幼稚園長会編著 (2001) 『幼稚園じほう』 第 29 巻第 3 号、全国国公立幼稚園長会
- (6) 全国国公立幼稚園長会編著 (2001) 『幼稚園じほう』 第 29 巻第 9 号、全国国公立幼稚園長会
- (7) 宮武由紀子・藤澤典子著 (1999) 『高松園舎の指導計画』 香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎